

創学舎二四一

No.261

動き出せない受験生

計画はこう立てる、参考書はこう選ぶ、英語はこうやれ、数学はこうやれ、等々という

ことはいくら細かく知っていても、

それは要するにレールを敷いたとい

うだけのことであり、またレールの

上に汽車をのせたというに過ぎない。

どんな非のうちどころのないレールや

汽車ができあがっても、それだけでは汽車は

1メートルはおろか、1センチも動かない。

それを動かすには、石炭に火をつけること

が必要である。いったん石炭に火がつき燃え

上がれば、やがて汽車はうなりを立てて走り

出す。今までレールや汽車それ自体のために

費やした努力が、この時、この石炭の燃え上

がる時、それによってことごとく生きてくる

のである。

もちろん石炭が燃えなくとも、他からの力

で押すか引くかすれば、少しは動くかもしれない。

しかし、それがいかに困難であり、苦

しいものか僕は知っている。そして驚くべき

力の消費消耗を伴うものであることも知っ

ている。

ところで実際に受験生に接して感じるこ

とは、まったく燃えないか、またはほんの少

ししか燃えない汽車を、無理に、あるいは他

の力に押されたり引かれたりしながら、時には

はいやいやながら動かしている者が大半である



しかし、いやいやながら動かしているものでも、不思議なことに、きちんとやることによって動き続けることができるのです。

そして、動き続けているうちに本当の火がつくものなのです。そのときまでは、なんとかふんばらなくてはダメなのです。(柳)

二四〇円

九州から上京して数年間、銭湯は私のオアシスであつた。バイトで生活費を稼ぎながら

勉強する。いわゆる苦学生。(こついえばか

つこよいが、実態は読書と詩作と宴会(ただ

酒)がメインの日々。(バイトで汗まみれに

なつた体を銭湯の湯ぶねにつけているとき

が、一日のなかで最も心の安らぐ時間であつ

た。

さて生来の怠惰が原因で(今も変わってい

ないが)失敗の連続。一浪目の秋のことだ。

あることをきつかけに、少しは頑張ろうと決

意した私は、受験までの勉強と資金のやりく

りの計画をたてた。かなり綿密に。これまでの

の失敗から、一月はバイトを休んで勉強に専

念することにしたのだが、とんでもないこと

に気づいた。受験費用と入学のための費用が

どう考えても足りない。母子家庭なので、生

活費から学費まで全て自分がかまかなうこと

が絶対の条件。私立なんてとんでもない。受

けるのは国立のみ。入ってしまったら奨学金で

何とかなるだろう。そんな状況の中で、ある

程度の計算はしていたつもりだったが、甘か

つた。どうしよう。

考えた末の結論が、銭湯代を節約して貯金

することであつた。週二、四日働くことを条

件にバイト先の寮にタダで住むことを許されていたが、風呂もシャワーもなし。あるのは、洗濯機置き場の水道のみ。これを活用して毎日水シャワーで済ませることにした。シャワーや石けんは寮の仲間のものを黙ってもらう。十月から始めて、一日二四〇円ずつ貯金箱に入れる。何があってもやり遂げる。二四〇円×三〇＝七二〇〇円。十、十一、十二、一、二とやれば三六〇〇円。手持ちのお金を合わせればなんとかなる。

十月。水は冷たかつたが、なんとかふんば

つた。十一月はそれなりに冷えていたが、そ

れでも歯をくいしばる。そして、十二月。東

京としては、かなり寒い年であつた。ある日、

大雪が降つたのだが、その日の水シャワーの

ことは一生忘れない。ホースが凍つて水が出

ない。急いで共用の台所でお湯をわか

かし、それをかけて水が出るように

なつたが、体にかかる水がとてつも

なく冷たい。「ウォー」と叫びながら、気合

を入れて体を洗う。洗い場の外は吹雪。破れ

たガラス窓から、吹き込む雪が私の体にかか

る。「負けないぞ!」とつぶやきながら体を

洗う私は、その時、上京以来初めて泣いた。

「なんでこんなにきついなだ...」

その夜を乗り切つた私は、強くなった。二

月未まで、十回ではきかないほど、雪の多い

年であつたが、水シャワーは一日も欠くこと

なく続けた。風邪もひかず、何故かただ酒・

ただ飯を食わせてくれる他人様も増えて、週

一、二回はお呼ばれで、「ありがとうござい

ます。」月に一キロのペースで太つていった。

勉強以外は全て順調に進んだ。そして二月末

目標額達成...

二四〇円。この数字を見ると、今でも涙腺がゆるむ。二四〇円の値札があると、立ち止まって見てしまう。吉野家の豚丼はこの二四〇円にプラス九〇円...。あれから四半世紀以上が過ぎたけれども、二四〇円の思い出は、私の青春のページに黒々と記されている。(小林(健))

世界陸上

世界陸上が十六年ぶりに日本(大阪)へや

つてくる。十六年前の世界陸上といえば、東

京大会でカールルイス(ご存知でしょう

か?)が男子一〇〇mで世界新記録を出した

ことが思い出される。そして、今回の世界陸

上では陸上生活の集大成と位置づけて挑も

うとしている選手がいる。それは、男子一〇

〇mとリレーに出場予定の朝原選手である。

長年日本人がいまだ破ることのできない十

秒の壁とずっと戦い続けている選手である。

今季に入り好記録をつぎつぎと出している。

朝原選手は今回なんとしても地元の大阪で

最後にメダルがほしいといろいろなメデイ

アで口になっている。男子一〇〇mでメダルが

取ればよいのだが、残念ながらもなかなか十

秒を切れる力がない。決勝に残れるかもわか

らない。そこでメダルを狙つのは男子四×一

〇〇mリレーである。なぜなら、リレーには

バトンパスがあるからだ。日本は他の国より

若干走力で劣る部分がある。しかし、毎回大

きな大会では、日本チームの健闘がたびたび

見られる。その秘密はバトンパスに多くの練

習時間を割いているからである。今回も日本

チームは、走力をあげることはもちろん、バ

トンパスの練習には特に力を入れているだろう。

リレーについて考えてみると受験につながる人が多い。志望校に合格するには、各科目で合格ラインというゴールに向けて、しっかりとトンパスができるかどうかにかかっている。たとえば、第一走者の遅れをバトンパスでつないで第二走者が巻き返すように、苦手科目で得点が伸ばせないところを得意科目で補えばいい。得意科目で点数を伸ばしきってしまった場合は、その代わりに苦手科目に勉強時間を割いていく。これらを繰り返し実行していくと、次第に志望校へのゴールに近づいていく。さらに、大切なのは受験当日の各科目のバトンパスである。残念ながら私自身は、高校入試の本番、一番得点源となる二番目の科目で絶対にこの問題を解くんだと正答率が低いものに時間をかけてしまい、第一志望の高校には不合格となってしまった。リレーで言うとバトンを渡す前に転倒してしまっ



たようなものだ。合格というメダルを手にしたいと考えると、まずはしっかりと合格ラインを超えるためにどの問題が解けないといけないのか考えるべきである。受験に全科目満点である必要はない。結果的に合計で合格ラインに到達すればよいのである。したがって、これからの模擬試験では今の自分の力と制限時間を見極めながら考えて解くこと。日本チームのようにゴールに少しでも近づいたために、これからは多くの時間を勉強という練習に割いていかなければならない。そしてその練習が、合格という結果を呼び、自信となる。

いよいよ熱い世界陸上が始まり、受験生にも勝負の時期がやってくる。がんばれ日本チーム、がんばれ受験生…… (小林(英))

記憶する「コツ」(その一)

受験生から色々な相談を受けるが、その中で目立つものの一つが、いわゆる暗記物が覚えられないという悩みである。そこで今回は、記憶の仕方についてある程度まとまったアドバイスをしておきたいと思う。何でもそうだが、記憶の仕方にもコツがあるのだよ。

ポイント 単純な記憶は十五秒で消えてしまう。

生徒の多くは、単語や歴史の用語など覚えてもすぐ忘れると嘆く。そして、覚えられないという事実が、自分の能力に対するマイナスの評価を生み、意欲をなくしていく。しかし、これは重大な誤解に基づいており、非常に残念なことだ。実は、単純な記憶は誰でも十五秒前後で消えるようになっていて、覚えたいことをすぐ忘れるというのは当たり前のことなのだ。しかし一定量のことを覚えたいことには話にならない。そこで知恵を使うことが必要になる。

ポイント 記憶力に差はない。記憶の仕方差がつく。

人間の能力には、それほど大きな差はない。記憶力も同じで、世の中に記憶力が良い人間などそれほどいるものではない。しかし、何でもよく覚えられる人というのはいる。それは、記憶の仕方がうまいのだ。従って、受験生諸君は、自分の記憶がどうのこうのという

必要はなく、記憶の仕方を変えれば良いのだ。安心したかい？

ポイント 覚えようという決意と習慣化が必要。

受験生のなかには時々思い出したように記憶に取り組んで、すぐ中断し、それを繰り返しという人が多い。後で述べるが、これではいつまでたっても記憶することはできない。こういふのをムダといふのである。暗記するためには、「必ず覚える」という決意と毎日継続するという習慣化が必要なのである。

ポイント 記憶に残るのは、強烈な経験と反復したことだけ。

例えば、目の前で交通事故を目撃すれば、それは強烈な経験として記憶に残る。しかし、単語や歴史事項などは、一つ一つが強烈な印象を与えるわけではないので、一度や二度見たぐらいでは記憶に残らない。ポイントの述べた、「十五秒の原則」通りすぐに消えてしまうのだ。これを記憶に残すには、くり返しやるしかない。覚える 忘れる 覚える 忘れる……。この連続のみが記憶すること



を可能にするのだ。そして、この連続の中で重要なのは「忘れる」ということである。忘れるといっても、頭の中から完全に消え去った訳ではなく、頭の片隅にはひっかかっている、はつきりと思いつけない状態にあるのだが、もう一度見たときに、「ああ、そうだった」と思い出すはずだ。この「ああ、そうだった」が脳に特別な刺激を与えて、記憶を強化してくれるのだ。この「ああ、そうだった」を何度も経験すること。これが記憶への王道である。

ポイント 理解していないことは覚えられない。

生徒の中にはとにかく丸暗記しようと頑張る猛者もいる。しかし、これは効率の点では愚かなやり方と言わねばならない。化学の元素記号など一部のものを除けば、理解していないことは、そのこと自体の印象が弱くて記憶しづらいのである。また、歴史用語などは、他の用語とのつながりが必要で、理解ということが一層重要となる。つづりと発音と意味が結びついていない単語、ただ覚えただけの公式、どの時代なのかもはつきりしない歴史用語……。せっかく覚えたのに「苦労さん……」何の役にも立ちませんということだ。理解することを面倒だと思ふ人は、残念だが受験をあきらめてもらつしかない。(以下次号)

『親子の関係』いじめの周辺』は休載です。



受験生は読め！(合格のコツがここにあり)

勉強法・精神面のケアなどについて、創学舎講師陣が書いたものです。

非売品です。希望者には無料で差し上げます。

愛の壁 お父さんお母さんあなたの愛は子供に届いていますか (著者 小林 憲右)

創学舎ニュースの編集責任者 小林が二十一年間書き続けてきた記事の中から抜粋・加筆したものです。

浅野書店・ブックス鈴木・新星堂他全国書店で発売中。

卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍していた教室までご連絡下さい。